

氏 名	NUR SABAHAH BINTI ABDUL SUKOR
-----	-------------------------------

(論文審査の結果の要旨)

近年その問題が顕在化している二輪車の交通事故の削減を考える時、走行環境要因の改善のみならず、ヒューマンファクター、すなわち、運転者特性を考慮に入れることは極めて重要である。なぜなら、実際に多くの交通事故の原因は、運転者特性に帰属されうるからである。ついてはこの研究では、交通事故に繋がりを危険挙動としてスピード超過とヘルメット未装着の二つを取り上げ、その二つの危険挙動を生じせしめる心理学的要因を理論的、実証的に明らかにすることを目的としている。またそれに加えてこの研究では、二輪車道の種類の相違が運転者の危険挙動、ならびにその心理学的規定因に及ぼす影響を探索事としている。

以上の目的の下、マレーシアの二輪車利用者を対象として、運転時危険挙動の頻度や、その規定因となる心理学的変数を測定するアンケート調査を実施している。分析の枠組みとして、予定行動理論や規範活性化理論、規範的社会影響理論、リスク認知理論などの心理学理論を援用している。これらの理論に基づくと、危険挙動についての欲求水準、態度、知覚行動制御、リスク認知、違反検挙恐怖心、道德意識、他者の危険行動知覚、等が危険挙動の要因であることが予期されることから、これらをアンケート調査で測定している。

これらのデータを用いることで、危険挙動を従属変数として、それらの規定因を説明変数とする回帰分析を行った結果、他者の危険行動知覚が支配的要因である事などの実証的知見を得ている。さらに、構造方程式モデルを用いることで、それらの心理要因や、危険挙動の変数に、二輪車道の相違が及ぼす影響も分析し、車線の種類と危険挙動の種類によって、危険挙動に影響を及ぼす心理要因が異なることを明らかにしている。

最後に、これらの実証的な知見に基づいて、マレーシアにおいて交通事故を削減するためには、それぞれの心理要因に影響を及ぼす交通安全キャンペーンが有効である可能性を指摘している。

以上の様に、本論文は二輪車運転行動の危険挙動についての影響要因を、心理学理論を踏まえつつ実証的に分析したもので、交通安全を目指した新たな対策に資する基礎的研究に位置付けられ、学術上、実務上寄与するところが少なくないと考えられる。

よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。平成23年2月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

(続紙 1)

京都大学	博士 (工 学)	氏名	NUR SABAHAH BINTI ABDUL SUKOR
論文題目	FACTORS AFFECTING MOTORCYCLISTS' RISKY BEHAVIORS IN DEVELOPING COUNTRY – A STUDY FROM PSYCHOLOGICAL PERSPECTIVE. (発展途上国における二輪車運転者の危険挙動に対する影響要因分析－心理学的視点から)		
(論文内容の要旨) 本論文は、以下の7つの章から成り立っている。 第1章は序論であり研究の背景を述べ、近年顕在化している二輪車の交通事故の削減を考える時の問題を取り扱う旨が述べられている。その中で走行環境要因の改善のみならず、ヒューマンファクター、すなわち、運転者特性を考慮に入れることは極めて重要であることが示されている。このことは、実際に多くの交通事故の原因は、運転者特性に帰属されるからであるという点が指摘されている。ついてはこの研究では、交通事故に繋がりうる危険挙動としてスピード超過とヘルメット未装着の二つを取り上げ、その二つの危険挙動を生じせしめる心理学的要因を理論的、実証的に明らかにすることを目的としている旨が述べられている。またそれに加えてこの研究では、二輪車道の種類の相違が運転者の危険挙動、ならびにその心理学的規定因に及ぼす影響を探る事としているという旨も述べられている。 第2章は、本研究で取り扱う危険挙動を説明するための既往研究がとりまとめられている。既往研究の中で、本研究で活用可能な理論として様々なものが述べられており、予定行動理論や規範活性化理論、規範的社会影響理論、リスク認知理論などの心理学理論で説明されている。これらの中の予定行動理論とは、行動を意図が決定する一方、意図は、態度と知覚行動制御、個人規範の三者で決定されるとする理論である。一方、規範活性化理論は、道德意識が行動を決定すると考える理論である。その他にも、リスク認知、違反検挙恐怖心、道德意識、他者の危険行動知覚、等が危険挙動の要因であることが予期されることが、既往研究に基づいて一つずつ示されている。そして、これらの既往研究のレビューに基づいて、本研究で取り扱う危険挙動についての説明変数が定義されている。 第3章は、本研究で、危険挙動の影響要因を分析するための基本データの概要が述べられている。本研究で分析するデータは、マレーシアで取得されるもので、第2章で一つずつ説明されたそれぞれの心理要因が測定されている。また、従属変数として、ヘルメット未着用とスピード違反の2つが想定されているが、これらの実施頻度も測定されている。なお、それぞれの従属変数、説明変数は、二輪車レーンがある場合と無い場合、そして、ある場合についてはどういう種類のレーンであるかがそれぞれ設定／測定されている。			

第4章から第6章は、第3章で得られたデータを分析した結果が示されている。まず、第4章はヘルメット未着用とスピード違反という2つの危険挙動の心理要因として何が統計的に有意であるのかが、重回帰分析手法を用いて分析されている。その結果、ヘルメット未着用とスピード違反に対する態度が有意であることが示されている。そして何より重要な変数として浮かび上がったのが、「他者の行動頻度」であった。このことは、ヘルメット未着用とスピード違反のそれぞれにおいて、重要な影響要因が「他の人もやっている、と認識することに伴う同調効果」であることが明らかにされた。続く第5章は、ヘルメット未着用とスピード違反という危険挙動の影響要因が、二輪車レーンがあるところと無いところで、どの様に変化するのか、という分析であった。分析の結果、第4章と同様に、やはり、いずれの場所においても同調効果が支配的な要因であることが改めて示されている。第6章にまとめられた3つめの分析では、レーンの相違が危険挙動の先行要因、ならびに、危険挙動そのものにどのような影響を及ぼしているのかが分析されている。それより、二輪車専用レーンでは、スピード違反が優越する傾向が、統計的に明らかにされている。

最後に第7章は、以上で得られた知見がとりまとめられると同時に、マレーシアにおいて交通事故を削減するためには、それぞれの心理要因に影響を及ぼす交通安全キャンペーンが有効である可能性が議論されている。